

島根県立石見美術館

研究紀要

第4号

2010

目次

資料紹介 島根県立石見美術館所蔵 大下藤次郎日記(第4回) …………… 川西 由里 1

資料紹介 河邊榮養 石橋和訓画伯小伝について …………… 真住 貴子 20

〈資料紹介〉

島根県立石見美術館所蔵 大下藤次郎日記 (第4回)

川 西 由 里

明治三十四年之記

○

年々歳々幸福を以て迎へ幸福を以て送らるゝ吾家は比年に於ても一層幸福に一層希望を大にして送迎せられたり吾技術は幾分の進境を呈し吾家庭は平和に吾家族の健康は益々増進せり吾事業につきては水彩画の葉発刊によつて名声頓に世に布き日月会の出品によつて新聞雑誌に賞賛の記事を見作品此年に於て世に頒つ事数百枚加ふるに近き未来に於て海外に遊はんとするの希望を生し其望を達すべき良好の手段を得て限りなき幸福を感じつゝあり地方移住も此年に於て行はれ将来画室を設くべき地も此年に於て吾領有に帰せり希くは将来をして此年に於けるが如く幸福にあらしめ給はん事を神に願ひて序言を結ばんかな

明治三十五年一月於青梅 大下藤次郎手記

○日記摘要

青梅阪上旅館に於て新年を迎ふ午後金比羅山に登りて極めて愉快を覚ゆ (一月一日)

廣瀬氏と共に吉野村へゆく梅樹極めて多し此日も鶴沢氏と共に金比羅山へ登る (一月二日)

正午帰京家族皆無事○四谷より敬子、清子、龍雄文雄等来り泊す (二月三日)

京都より伊藤氏出京真野氏も来合せ快談す (一月六日)

宮嶋父及び大下兄を招き新年会を兼ね正男誕辰を祝す (二月十一日)

竹下氏、田山氏、真野氏を招き新年会を開く○正男数日前より少しく病む多分風邪ならん (一月十二日)

青梅に於ける写生を補修す○松本兄来り会飲す (一月十三日)

主人風邪に冒さる (一月十四日)

水彩画の葉の稿を記す○主人風邪快方に向ふ○正男全快す (二月十二日)

春子四谷へゆく (一月三十一日) 春子長尾氏へゆく (二月四日)

田山氏の新年会に臨む眉山、有朋、風葉の諸氏あり (二月七日)

短銃を求む (二月十三日)

春子近藤氏及宮嶋方浅草辺等へゆく (二月十四日)

中村公証役場に於て佐藤代議士と真砂町地所払下に関する契約を為す (二月十九日)

家族及び半田方の妹と共に東京座を見る (二月二十二日)

竹下氏と共に音羽辺に観梅す (二月二十四日)

春子飯田町に老母の見舞にゆく (二月二十六日)

- 竹下氏よりバイブルを送らる (三月一日)
- 水彩画の葉脱稿す○四谷より三人来泊す (三月二日)
- 竹下、羽石の二氏と共に日月会、丹青会、美術会等を見る (三月三日)
- 崖下の写生を始む本年写生の初めなり (三月四日)
- 崖下の写生をつぐ (三月五日)
- 水彩画葉に挿入すべき木版下の図を描く (三月七日)
- 崖下の写生をつぐ (三月八日)
- 崖下の写生をつぐ○蓮池の模写をなす○竹下氏に招かれ夕食を共にす (三月九日)
- 小倉の秋模写す (三月十一日) 小倉の秋成る (三月十二日) 小倉の秋直す (三月十三日)
- 崖下の図成る (三月十四日)
- 春子四谷へ遣す (三月十五日)
- 洋画青年会の集會に臨む (三月十六日)
- 明治美術会新年會に臨み小山氏博覽會談をきく (三月十八日)
- 吾家族竹下氏夫妻と共に早起飯田町に汽車に乗り吉野村に終日觀梅
- 青梅に遊ひて夕景歸京す (三月十九日)
- 真野氏と共に目白に写生す (三月二十一日)
- 目白近衛邸の梅を写す (三月二十二日)
- 目白写生を補修す (三月二十五日)
- 梅の写生をつぐ (三月二十六日) 上野に田崎先生の展覽會を見る (三月二十七日)
- 早稲田小流の写生を始む○午後高田麦畑を写す○春子四谷に遣す
- (三月廿八日)
- 写生畫の補修をなす○春子墓參に遣す (三月三十日)
- 早稲田小流の写生成る○高山大病の報ありて見舞にゆく (四月一日)
- 早稲田小流の写生更に補修す (四月二日)
- 高山権三郎氏死去す此夜通夜のため一泊す (四月六日)
- 神田高山方に一泊す (四月八日)
- 神田高山葬式に列す (四月九日)
- 目白麦畑成る (四月十四日) 写生畫を補修す (四月十七日)
- 春子半田へ遣す○秋山伯母先頃來り滞留せしも今日歸宅す○我家の菜園写生を始む (四月十八日) 菜園写生をつぐ (四月十九日)
- 春子竹下妻君と共に女子大學へゆく (四月二十日)
- 菜園写生をつぐ (四月二十一日) 桜の写生を始む (四月二十三日)
- 菜園の写生を繼ぐ (四月二十五日) 桜の写生をつぐ (四月二十六日)
- 桜の図成る (四月二十七日)
- 高山ダイ親族會議の結果同人の後見監督人に選定さる○明治美術會大會に臨席す (四月二十八日)
- 菜花の写生をつぐ○春子彌生町へゆく (四月三十日)
- 高山事件に付後見監督人の資格を以て今津公証役場に於て財産分割に関する契約を為す (五月九日)
- 春子飯田町へ遣す (五月十三日)
- 駒井町の家荷物取まとめ家族一同四谷へ移る (五月十四日)
- 鈴木へ引渡せし油絵を補修す (五月十六日)
- 高山事件現金取引を終る (五月十八日)
- 青梅千ヶ瀧宗建寺内に移住す (五月二十一日)

- 古利根の図模写す（五月二十五日）古利根の写し成る（五月二十六日）
- 庭の図写生にかゝる○伊東海岸の図をかき始む（五月二十九日）
- 富士の図をかき（五月三十一日）庭の図写生をつぐ（五月三十一日）
- 松原の図を直す○庭の写生をつぐ（六月一日）
- 庭の写生をつぐ（六月二日）松の図を直す（六月三日）松の図成る（六月四日）
- 庭の写生をつぐ（六月五日）庭の図をつぐ（六月六日）庭の写生成る（六月七日）
- 写生画を補修す（六月八日）花の写生を始む（六月十日）
- 花の写生をつぐ（六月十一日）花の写生成る（六月十二日）
- 竹林の写生を始む○巴里出品の水彩壺面売却の報に接す（六月十三日）
- 竹林写生をつぐ（六月十四日）蓮の図をかき直す（六月十五日）
- 蓮の図をかき直す（六月十六日）竹林写生をつぐ○蓮の図を直す（六月十七日）
- 竹林写生成る○蓮の図成る（六月十八日）
- 杉の写生を始む○花の絵をかき直す（六月二十日）
- 杉の写生をつぐ○花の絵をつぐ（六月二十一日）
- 花の絵をつぐ（六月二十二日）花の絵成る（六月二十三日）
- 清水谷の図をかき始む○水彩画の架発売す（六月二十四日）
- 杉の写生をつぐ○清水谷の図をつぐ（六月二十五日）
- 菖蒲の写生を始む○清水谷をつぐ（六月二十六日）
- 菖蒲写生をつぐ（六月二十七日）清水谷をつぐ○正男発熱（六月二十八日）
- 十八日）
- 杉の写生をつぐ○菖蒲の写生をつぐ（六月二十九日）
- 目黒水車かき始む（七月二日）目黒水車かきつぐ（七月三日）
- 水車の図をかき継ぐ（七月四日）水車の図をつぐ（七月五日）
- 東京より柳田君ら来らる（七月八日）菖蒲の写生をつぐ（七月十日）
- 菖蒲の写生成る○富士の図をかき始む（七月十一日）
- 富士の図をかき始む（七月十二日）杉の写生をつぐ（七月十三日）下婢の雇をとく（同日）
- 杉の写生をつぐ○夜明の富士を模写す（七月十四日）
- 松の図成る○春子十三日より四谷へゆく此日帰宅す（七月十五日）
- 富士第二成る（七月十六日）杉の写生成る○榎間橋を写し直す（七月十七日）
- 榎間橋をつぐ（七月十八日）榎間橋をつぐ（七月十九日）
- 榎間橋成る○日光をかき始む（七月二十日）
- 日光の絵成る○真野氏東京より来泊す（七月二十二日）
- 百合の花写し始む（七月二十四日）真野氏帰京し竹下氏来る（七月二十五日）
- 竹下氏帰京す（七月二十六日）百合の花仕上る（七月二十七日）
- 多摩川の夕陽写生を始む（七月二十八日）夏菊写生始む○夕陽をつぐ（七月廿九日）
- 川口の景をかき始む（七月三十一日）竹内生来る（同日）
- 東京へゆき竹下氏方に一泊（八月一日）
- 東京より帰る○龍雄も共に来る七月二十五日より清子来り居ればなり○久野氏来り滞留す（八月二日）

- 蓮の図をかき始む○七月二十五日より来れるふじ及清子帰京す（八月三日）
- 蓮の図をつぐ（八月四日）蓮の図なる（八月五日）川口の景成る（八月六日）
- 弁天の図をかき始む（八月七日）弁天の図をつぐ（八月八日）信康来る（同日）
- 弁天の蓮かきつぐ（八月九日）弁天の蓮成る○四谷より母及文雄来る（八月十日）
- 富士大作にかゝる（八月十一日）富士の大画をつぐ○四谷母、龍雄文雄久野帰京す（十二日）
- 富士大画をつぐ○星加氏来る（八月十三日）
- 富士大作成る○星加氏帰京す（八月十四日）
- 武内生及信康と共に羽村へゆく（八月十七日）
- 興津富士かき始む（八月十九日）
- 暁長山の写生を始む○興津富士成る○第二富士かき始む○多摩川の夕陽写生をつぐ○正則中学生来り泊す（八月二十日）
- 暁の写生をつぐ○第二富士成る○中学生等帰京す（八月二十一日）
- 富士第三にかゝる○岩村氏等訪はる（八月二十三日）
- 富士第三成る○沼津富士かき始む（八月二十四日）
- 夕陽の写生成る○沼津富士をつぐ○信康帰京す（八月二十五日）
- 畠の写生を始む○沼津富士をつぐ○吉田氏兄妹来泊す（八月二十六日）
- 豆の花の写生を始む（八月二十七日）小画二葉を写す（八月二十八日）
- 畠の写生をつぐ○豆の花の写生をつぐ（八月二十九日）
- 豆の花の写生をつぐ○畠の図を直す○吉田氏二人帰京す（八月三十日）
- 豆の花をかきつぐ○沼津富士成る（八月三十一日）
- 豆の花の写生をつぐ（九月一日）畠の図を直す○大磯の月をかき始む（九月二日）
- 大磯の月成る○千石橋をかき始む（九月三日）千石橋をつぐ（九月四日）
- 千石橋成る○清水をかき始む（九月五日）清水をつぐ○竹内生帰京す（九月六日）
- 清水成る○蓮池かき始む（九月七日）
- 家族と共に東京へゆく○四谷に投宿夜分父の不機嫌にて大に迷惑す此夜真野氏に逢ふ（九月八日）
- 用達をなし竹内氏に投宿す（九月九日）竹下氏に泊す（九月十日）
- 四谷へ帰り一泊す（九月十一日）青梅に帰宅す（九月十二日）
- 記念日につき芙蓉の写生を為す○小画を真野氏に送る（九月十五日）
- 蓮池の図成る○水彩画の葉の事に付藤沢氏来る（九月十六日）
- 高山久次郎来る再度出京の煩あり（九月十七日）
- 紫苑の図かき始む（九月十八日）高山の件に付出京竹下氏に一泊す（九月十九日）
- 午前帰京す（九月二十日）紫苑の図をつぐ（九月二十一日）
- 紫苑の図成る（九月二十三日）水車の図をかき始む（九月二十五日）
- 豆の花写生をつぐ○水車の図成る（九月二十六日）豆の花写生成る（九月廿七日）

- 河原の夕陽成る（九月二十八日）竹林写生を始む○品川の図をかく（九月三十日）
- 竹林写生をつぐ○金比羅山に茸狩を試む（十月一日）
- 竹林写生をつぐ（十月二日）竹林写生成る○彼岸花をかき始む（十月三日）
- 彼岸花成る（十月四日）矢口渡かき始む（十月五日）矢口渡成る（十月六日）
- 小名路の菊かき始む（十月七日）小名路成る○白鳥の図を始む（十月八日）
- 白鳥の図成る○筑波神社をかき始む（十月九日）
- 筑波神社をかき継ぐ○独乙協会校生山崎生来る（十月十日）
- 金剛寺落葉の写生を始む○筑波神社成る（十月十一日）
- 霞ヶ浦の図成る○曾根の池をかき始む○上野公園開会の日月会に水彩画十二面を出品す（十月十二日）
- 曾根の池成る○桃花をかき始む（十月十四日）桃花をつぐ（十月十五日）
- 桃花成る○古塔をかき始む（十月十六日）古塔をかきつぐ（十月十七日）古塔成る（十月十八日）蓮花をかき始む（十月十九日）
- 利根の桃をかき始む○久野氏東京より来遊さる（十月二十一日）
- 桃の図成る○桜を始む（十月二十二日）
- 不動の像写生を始む○桜をつぐ（十月二十三日）桜成る（十月二十四日）
- 修善寺の図成る○大原をかき始む（十月二十五日）
- 不動態生を為す○大原をつぐ○吉沢といふ人入門す（十月二十六日）
- 大原の図成る（十月二十八日）水車の図成る（十月二十九日）
- 村社の図をかき始む（十月三十日）村社出来す（十月三十一日）
- 雨の漁舟成る○矢口の渡成る（十一月一日）
- 水戸公園成る（十一月二日）
- 東京より稲吉氏及高山の件に付川舟生来る（十月三日）
- 村道の図をかき始む○東京中学生竹松生来り一泊す（十一月五日）
- 家族を伴ひ出京直ちに竹下に投ず（十一月六日）
- 日月会を見る○宮嶋へ一泊す（十一月七日）
- 竹下氏に泊す（十一月八日）
- 青梅に帰宅す○秋山敬子共に来る（十一月九日）
- 村道の図成る○柏原富士をかき出す（十一月十一日）富士成る（十一月十二日）
- 宮城の図をかき始む（十一月十三日）秋の森写生す○宮城成る（十一月十四日）
- 水車の図成る○大学の門をかき始む（十一月十五日）
- 大学の門をつぐ○石川氏来泊す○正男少しく不快（十一月十六日）
- 竹下氏及鈴木氏来泊す○鈴木氏夕帰京す○青梅瀧の上の地所を購求す（十一月十七日）明治美術会々務委員に挙げらる（同日）
- 大学の門をつぐ○竹下氏帰京す○鶴沢氏と共に拝島辺へゆく（十一月十九日）
- 地所登記のため世■処へゆく（十一月二十日）
- 拝嶋へゆき二葉写生す（十一月二十一日）大学の図成る（十一月二十二日）
- 二ヶ月金七円の割を以て浜中某に地所を貸与す（十一月二十四日）

拝嶋の月をかく○水車前の森出来す(十一月二十五日)
 瀧の下水車写生す○拝嶋の月成る(十一月二十六日)
 大梁の橋を写生す(十一月二十七日)
 絵画修業のため日高といふ人来る○敬子帰京す(十一月二十八日)
 虹の図成る(十一月二十九日) 金剛寺落葉成る(十一月三十日)
 拝嶋水車かき始む(十二月二日) 拝嶋水車成る○地所登記をす
 (十二月三日)
 大梁水車写生し始む(十二月四日) 大梁水車出来す(十二月五日)
 拝嶋富士かき始む○信康子来る(十二月六日)
 拝嶋富士成る○信康帰京す(十二月七日)
 竹の渡写生す○石川氏と共に吉野村に川上氏を訪ひ山上に遊ぶ○石
 川氏帰京す(十二月八日) 竹の渡しをつぐ○四谷父来泊す(十二
 月九日)
 家族と共に近郊を散歩す(十二月十日) 竹の渡成る○四谷父帰京す
 (十二月十一日)
 熊川の月をかき初む(十二月十二日) 熊川月成る○鞆の海成る(十
 二月十三日)
 白藤の図かき始む(十二月十四日) 白藤の図をつぐ(十二月十六日)
 白藤の図成る○錦帯橋かき始む(十二月十七日) 錦帯橋成る(十二
 月十八日)
 姫路城かき始む○平岡氏ミヤ子入門す(十二月十九日)
 姫路城をかきつぐ(十二月二十日) 家族と共に出京余は竹下氏に一
 泊す(十二月廿一日)
 四谷宮嶋方に一泊す(十二月二十二日)

午前東京発家族及宮嶋母同伴箱根宮の下五段に投宿す(十二月二十
 三日)
 姫路城成る(十二月二十四日) 秩父の山をかき始む(十二月二十五
 日)
 秩父の絵成る○半原の雨かき始む(十二月二十六日) 半原の図をつ
 ぐ(十二月二十七日)
 半原の図成る(十二月二十八日) 比日明星ヶ嶽に登る(同日)
 宮嶋母帰京す(十二月二十九日) 立川の図かき始む(十二月三十日)
 同図成る(十二月三十一日)

○経過

新年は青梅坂上に迎へ三日帰京一月二日は風邪のため作画を為さず
 比間水彩画の葉を著はす比書世の希望に添ひ年内六版を重ね二万部
 を売れり三月より近郊の写生を為す四月高山家の紛紜のために渦中
 に投せられ五月中旬迄殆と一日として寧日なく漸く落着を期として
 目白坂の家を親友竹下氏に貸し青梅に移り千ヶ瀬宗建寺に二室を借
 りて住ふ爾来世俗の煩を逃れて自己の職業に専念する事を得たり偶々
 東京に出るや不愉快の事多く殆と魔界に入りし感あり八月の候は
 東京よりの来客多く極めて賑ひたり秋にも二三の友人の来るあり比
 年七八月の候米国ポストンより松木氏来り兼て貯へありし水彩画の
 大部分を望まれ売て数百金を得しを以て余も亦来秋を期して外遊せ
 んと企て同行者に石川寅治氏を得爾来其携へゆくべき水彩画を作る
 に多忙を極む加ふるに水彩画の葉によりて質問或は絵画の批評を求
 むるもの多く又世間一般水彩画の嗜好を生せしにや珍しくも注文を
 受くる事もあるなり十月には上野公園に開かれし日月会に作品十二

点を出品し大に世の好評を受けたり比間東京にゆく事数回十二月高山事件も稍落着を告げ其整理のため下旬頃上京し夫より家族及宮嶋母を伴ひて箱根に遊び爰に越年を為せり

○起居

起床の時間は四季日出を以てし就床は九時より十時の間とす秋期の頃早起写生を試みし事あり又嚴冬に到る迄日出前二時間を英語の勉強に充てし事あり日曜日及大祭日には業を休むと共に他の六日間は必ず画架に対するの定めなり但外国行準備のため戸外写生の日は割合に多からざりし英語の勉強は毎夜二時間を以て是に充てたり飲食の事は前年と異なるなし五月青梅に移りて以来は麦を以て米飯に混する事とせり理髪入浴其他の事前年と異なる事なし

○思想

吾家の消息は続いて執筆せり是によつて詳細を知るに難からず希望として茲に記し置かん事を願ふは豫定通り来秋渡来し多少の資を得ば英国に渡り水彩を研究し更に欧州諸国の景況を見て帰朝し若し米國にして猶望みあらば一年間住所を定めず全國を旅行して絵画を作り更に米國にて相應の資力を作り帰朝後青梅の地に画室を設けて東京の家屋は人をして留守せしめ数年徐に研究を重ねん事なり而して其研究の結果幸に優品を作り出し得ば其折々世界に示さんため渡米渡欧を試むべく猶内地に在りては自己一個人の展覽會を開き次て一般に水彩画の趣味を知らせんがため地方巡回の展覽會を開かん事今日よりの希望なり要するに比年に於て吾思想は一層濶く一層高上となりし事と信ず

○健康

一月に於て風邪に罹り売薬の二三を服せしのみ医師に親しまず爾来一兩日風邪に苦しむ事あるも慨して健全なりし

○読もの

主として読みし新聞は時事新報、国民、朝日等にて間に万朝、二六、報知、中央、読売等を見たり雑誌には太陽、文芸俱樂部、新小説、流行、帝國文学、俳声、中学世界、十善宝屈、半面、ホトトギス、新文芸等書物には星亨、まこも集、新聞社の裏面、教育書、益軒十訓、美術講話、洋画手引艸、俳諧逸話文集、婦人の半面、アア売懶國、決死隊、海國少年、英文学史、群書類従、白梅嬢、探偵奇聞、青山白雲、自殺、歴史の片影、卯花衣等重なるものなり

○学事

水彩風景画の写生にかゝるもの二十四枚書き直し二十七枚記憶にかゝるもの四十四枚なり巴里博覽會出品の内花園の図彼の地に於て売却され百二十フランを得たり
日月會へ十二点出品して内一面を売却せり
米國ポストン松木氏へ百余枚を売却す八咫屋店注文によりて売却せるもの十数枚あり
教を受けたしとて新に来るもの瀧沢生、瀧島生、神藤生、吉沢生、平岡生其他数氏あり画をよせて評を乞ふもの山田生、高橋生、西山生、安原生、花鳥生、山口生、万生其他数人あり
作文には吾家の消息あり著述には水彩画の採あり
画架に向ひし日は百九十日にして内戸外七十三日なり

○ 経済

収入に於て水彩画売却代金六百七拾九円貸金回収金拾円五拾七銭銀行利子其他の雑収金七拾三円壹銭貸家料金八拾五円計金八百四拾七円五拾八銭にして支出は經常衣食住交際修業衛生等に金四百三拾四円九拾六銭臨時費及地所買入代に金四百拾五円四拾四銭計金八百五拾円四拾銭を支出せり

十二月三十一日現在の財産は小石川区関口駒井町地所建物金貳千五百円日本勸業銀行株券金參百円売価超過金七拾五円青梅町地所金三百貳拾円安田銀行当座預金貳百九拾円回収の見込ある貸金七拾円諸物品代金六百円現在金參拾六円拾七銭計金參千六百九拾壹円拾七銭也

○ 正男日記

比頃いろいろの所作をなす○熱きを知りて鉄瓶なぞに触れず○泣まねをなす事あり(一月三日)

少しく気分わるし(一月八日)元氣なし胃をいためしと覺し母親乳を病みし故か(一月九日一月十日)

医師長塚氏にかゝる(一月十二日)元氣に復す(一月十五日)全快(二月十七日)

母と共に徳川家へゆきさまさまの物を貰ひ来る(二月五日)

物につかまりて立ちしが今日よりは何もなくて起つ事を覺へたり(二月六日)

諸人によく愛さる就中竹下氏は極めて熱心に愛さる○タツタ、ナンくくくなどいふ事屢々なり(二月十八日)二階の階子を自由に上下す(二月十九日)

大に肥へたり○側にて豆腐やの話をせしに突然ブーくくといふ喇

叭の真似と覺し○比頃物を持ちて夫をふりルラくくくといふ事頻なり(二月廿六日)

感冒の氣味あり(三月九日)少しく快き様子なり(三月十二日)全快(三月十四日)

父母に連れられて青梅へゆく途中竹下氏に紐にて負はる竹下氏は洋服なりし故取合せ頗る面白かりし牛込停車場よりは父に抱かれて帰りぬ(三月十九日)

少しく歩まんとするの心あり(三月二十六日)

二三歩宛歩み始む(四月二日)甚だまめに歩む(四月十日)

よく歩行すカツコといふて下駄を欲しがる故求め与ふ○カンカ、キレーなどいふ(四月十三日)毎日一個宛鶏卵を食ふ(四月二十五日)

危き時にアーくくくと叫ぶ○比頃いふ言葉はルラくく、カーカー、チーチー、パツく、マンマ、カツコ、キレー、ネンネ、イヤイヤ、バアー等なり小児の絵を見て直ちにネンネといふ○不動様の若僧等に大に愛さる(四月二十五日)

痒き時にはカイーくといふオスワリといへば坐す(五月六日)

比頃体痒ゆかり夜分眠らぬ事あり(五月十日)

四谷の洗場にて桶の中に大便をなし母親大に苦しむ(五月十五日)

青梅へゆくに付村井、竹下、稲吉等より衣類を貰ふ(五月十九日)

青梅に來りマメと称する狗及池の緋鯉、鶏等と馴染となる(五月二十五日)

大元氣にて棒をとつて池の水をうち遊ぶ○き、わけ尤もよし父の言には殆と背かず○机上等少しも乱さず(五月二十八日)

近傍の評判よく諸方の人に愛さる(五月三十日)

池水に石を投じて喜ぶ○跳足にて走り廻る○補乳を朝、昼、夜とす間に飲ませず○欲しかる時宝丹をつく正男自ら薬をつけて辛ひくといふ(六月二日)何か欲しき時は父の手を持ちて茶箆筒の前に引張りゆく(六月三日)

比頃の言葉はタツタ、マンマ、ハイ、マメ、ワン／＼、コッコ、カアカ、ホーホケキョ、トウファイ、カンカン、チシ、キント、ドン／＼、ニイニ、タマ／＼、パイ／＼、ネンネ、アツカ、シー、ウー等なり○大便はよく教ふ小用は未だし(六月五日)

夜屢々泣き父と共に眠る事多し(六月九日)
単衣をきる(六月十四日)

好みて野イチゴを食ふ(六月二十五日)

下痢の気味あり○果物多き故か(七月五日)

医師にかゝり継て全快(七月九日)

オコツタ(落た事)ポツチャン(自分が人によばれるゆへ)ムメ、

ポー等の片言をいふ○毎朝顔を洗ふ○風呂に入る時多く父親と共にす(七月十日)

母親をよぶにカーサンといふ(七月十七日)

ビワ、モモ、タイ／＼、タケなぞ明かにいふ(七月二十日)

夕方なぞ父母と共に琴河原へゆき水につかりて遊ぶ○途中イチゴをさがして与ふれば大に喜ぶ(七月三十日)

この頃は父と共に河原へゆき腹巻一つとなりて水中に遊ぶ大喜びなり常に白き帽子を冠る○久野、竹内等の人々と親しむ(八月十日)
よく一人にて遊ぶ○寺の本堂に鬼のかけ物あり鬼の顔はと問へは顔をひかめて見せる(八月十七日)

食事の時なそ客をよびにゆく○食物ある時も客に分たんといふ(八月二十日)

東京にゆき病気となる(九月九日)青梅へ帰らんとむづかる(九月十二日)

青梅に帰りて後全快す(九月十四日)

きゝわけよく独りに遊び父母仕事中は決して妨げせず(九月二十五日)

父母より貰ひためし金参円五十銭貯金す(十月二日)

風邪の様子なり(十月三日)大によし(十月八日)

大体の言葉は明了に語る○知人多く毎夕父と共に郵便局へゆくにポツチャンと声をかくる小児多し○自分の名をポツチャンと心得何か所持の品はポツチャンのといふ(十月二十三日)花屋の娘コトチャンと親しむ(十月二十七日)

父及竹下氏は将来建築家をなさんなそ語る○竹下氏は七八歳の頃より預りて教育したしと望まる○少しく智のはたらき多き様子に付躰育を重くしつとめて智の発達を抑ゆる方針をとりつゝあり(十月三十日)

今日より昼の補乳を止む(十一月一日)

東京より帰りて後病気となり熱極めて高し腸胃を損せしならん(十一月十二日)医師井上の診察を受く(十一月十四日)元氣となる(十一月十八日)

鶏卵を好み食事の時に充分なり○体量重くなる事非常(十一月三十日)

比頃昼間一時間程就眠す(十二月一日)

小用を教えず依て過ちせし時は臀部をうつ事とす(十二月七日)

昨日より父母と共に箱根宮の下へゆく毎日二三度の浴するなり(十二月二十四日)

少しく鼻汁を出す○刻々に薄着なり○運動劇甚なり○オート・サマな
そいふ○君ヶ代等のうたを好み又音話し桃太郎さんを好み一度語れば
モットくといふ○物事秩序正しく他人のものと自分の区別整ひ
又父のものを母が用ひても不平を鳴らす○少しく伶俐に過るの感あり
(十二月三十一日)

○家族及親戚

妻春子益々健康なり夏以前乳を患ひて二回程乳医に罹りし外服薬等
せし事なし

弥生町に大下家極めて無事なり八月五日五女ふみ子を挙げ以来健全
なり五月以来神田高山へ遣はし置きし市太郎及ふさ歸り来り市太郎
は東京信用銀行へ通勤し夜分は簿記及英語を学ぶふさは子は渡辺女学
校へ通学す○鈴子は十一月女学校を退けり

目黒松本家無事なり明磨は神奈川県第一中学へ入れりときく

神田高山家四月六日主人死去後家督争の一大紛紜あり結局寿衛が相
続人となり代子は養子と共に別家し財産四分の一の分配受け千代寿
は八分の一の分配を得て情婦佐野といふ者と別居し久次郎も同しく
八分の一の分配にて上州桐生に染物工場の職工となりて日を送れり
相続者寿衛も身の上納まらず早晚瓦解の運命を免れざるべし

宮嶋家は家庭平和にゆかず屢々衝突ありて大に心懸りなり長男信康
三井家に在りしも病のため解雇され方行不定○現住宅歳末他に売却
せしときく

其他の親類格別異状なし

○交友

真野氏とは不相変なり七月中青梅に来らる同氏令妹他に嫁せられし
を以て同氏の令室を相談中なり○早川氏は三月頃病のゆへに諭旨免
官となり爾來氣の毒の生活を為せり○三宅氏は十一月十八日を以て
英国へゆかれたり妻君は北海道へ留守中居る筈なりと肺病の兆あり
ときけば北海道の氣候が身に適すべきや否氏につきてはいつも不愉
快の事多けれど感すべき勉強心に敬服し猶交遊中の最となす○森脇
氏病氣中なりしが二月殆と愈へ爾來郷里に帰省さる○竹下氏とは一
層親密を加へ今は兄弟も■ならぬ間となれり五月青梅に来る跡は氏
に任せたり○妻君夏中病氣一度堺へ帰省療養せられ秋に至て快愈帰
宅せられぬ○長野氏には相逢わざりしか書信の往復をたゞず○田山
氏、柳田(松岡)氏、鈴木氏、芳川氏、小笠原氏、伊藤氏、中川氏、
吉田氏、石川氏、大倉氏、倉田氏、有吉氏、木村氏、渡辺氏等不相
変なり○丸山氏は十月帰朝米國に於て成功せりといふ○新に獲し友
には蒲原氏、豊田氏、横地氏、鈴木真氏等あり

○雑事

主人の衣類として太織三ツ紋羽織袴枚新調し春子は太織三ツ紋羽織
及フラネル単衣新調其他自ら数枚を新調せり正男は平生着数枚を作
る
来客は二百七十二名にして八十八名減し訪問二百三十一名にして前
年よりは七十名減し来状六百二十七通にして前年より二百五十八通
増し発状六百二十四通にして二百九通を増せり

明治三十五年之記

明治三十五年の記

○
比歳もまた幸福を以て迎えたり兼て希望たりし欧米漫遊の志も満たし得たり客遊中の所感は前途の光明を認め得しと共に修養の益々大切なるを悟り幾多の利益を身に亨くる事を得たり吾将来の曙光は夫れ比歳に於て見られ得べきなり

明治三十六年七月於東京 大下藤次郎

○ 日記摘要

妻児と共に箱根宮の下龍雲館に於て新歳を迎ふ (一月一日)
瀧の写生を為す (一月二日)
単独乙女峠に向ひ山上に在て富嶽の写生をなす (一月三日)
瀧の写生を為す (一月四日) 瀧の図をかきつぐ (一月五日)
乙女峠の富士成る (一月六日) 乙女峠第二富士かき始む (一月七日)
乙女第二富士成る○仙石原かき始む (一月八日) 仙石原かきつぐ (一月九日) 仙石原かきつぐ (一月十日)
宮の下出発東京へ帰る○途小田原に原田未亡人を訪ふ○小峯梅園へゆく○家族は宮嶋へ余は竹下氏の家に泊す (一月十一日)
宮嶋家の紛争につき竹下氏と共にゆき徹夜して尽力す (一月十四日)
青梅へ帰る○弥生町鈴子共に来る (一月十五日)
箱根仙石原成る (一月二十日) 高輪夕陽成る (一月二十一日)
築地の図かきつぐ (一月二十二日) 築地の図成る (一月二十三日)
白丸橋かきつぐ (一月二十四日) 白丸橋成る○鈴子帰京す (一月二十五日)

十五日)

岩渕の富士かき始む (一月二十七日) 岩渕の富士成る (一月二十八日)

湯屋の写生をつぐ○春子動気を起す (一月二十九日)

大久保ツ、ジかき始む (一月三十一日) 大久保かきつぐ (二月一日)

大久保成る (二月三日) 興津海岸の図をかき (二月四日)

越ヶ谷茶店をかき (二月五日) 越ヶ谷茶店成る (二月六日)

千住河の図をかき (二月七日) 松樹の図をかき (二月八日) 小富士の図をかき (二月九日)

植物園菖蒲をかき (二月十日、十一日、十三日) 四ツ木花園をかき (二月十三、十四日)

雪の不忍をかき (二月十五日) 隅田村の雪、綾瀬の雪をかき (二月十七、十八日)

橋場の雪成る (二月十九日) 上野の雪かき (二月二十、二十一日)

栗田口成る (二月二十二日) 所々梅花開く、西分の山に遊ぶ (二月二十三日)

戸田川成る○富士小図成る (二月二十四日)

戸田川大画かき (二月二十五、六、七日)

芍薬をかき (二月二十八日) 芍薬の大をかき始む (三月三日)

長野氏上京につき会見せんがため出京竹下氏に泊す (三月四日)

東京より帰宅す (三月五日)

弥生町大下兄来青共に吉野村へゆき梅を賞すまだ少しく早し (三月六日)

芍薬の図成る (三月七日) 井戸端の梅写生す (三月八、九、十日)

芍薬の図成る (三月七日) 井戸端の梅写生す (三月八、九、十日)

芍薬の図成る (三月七日) 井戸端の梅写生す (三月八、九、十日)

芍薬の図成る (三月七日) 井戸端の梅写生す (三月八、九、十日)

芍薬の図成る (三月七日) 井戸端の梅写生す (三月八、九、十日)

芍薬の図成る (三月七日) 井戸端の梅写生す (三月八、九、十日)

- 湯屋の写生をつぐ（三月十一日）箱根早川の図をかく（三月十一、十二日）
- 有馬寺の図をかく（三月十二、十三日）梅尾橋をかく（三月十四、十五、十七日）
- 丸山健作氏来遊共に面白く一夜をかたる（三月十六日）
- 湯屋の写生成る（三月十八日）八郎瀧及石童橋成る（三月十九日）
- 熊本桜かき始む○真野紀太郎氏来泊す（三月二十日）
- 真野氏と共に金剛寺前を写生す○宮嶋母来泊（三月二十一日）
- 桜の図成る○宮嶋母帰京す（三月二十二日）
- 大雪にて真野氏と共に北斗山上に写生を試む（三月二十三日）
- 雪の図及近郊写生成る（三月二十四日）真野氏帰京す（三月二十五日）
- 京都の図をかく（三月二十五、六、七日）梅園をかく（三月二十七、八日）
- 一同出京す余は竹下氏へ家族は宮嶋に宿泊す（三月二十九日）
- 宮嶋に泊る○上野に太平洋画会を見る（三月三十日）竹下氏に泊す（三月三十一日）
- 青梅へ帰る（四月一日）北斗山及金剛寺辺を家と共に遊ぶ（四月三日）
- 枝垂桜を写生す（四月四日）金剛寺桜及住吉遠望を写生す（四月五日）
- 紫水会の山崎、肥田野、川俣、杉原来り一泊す（四月六日）
- 白丸橋をかく（四月七日八日）門前白桜を写生す（四月八日、九日、十日）
- 住吉の森写生す（四月十、十一日）二股尾に桃の写生をなす（四月十二日）
- 結婚記念日にて北斗山へ上る○菜花の図成る（四月十四日）
- 桃の図第二、第三をかく（四月十五、十六日）桃第四、第五かく（四月十六、十七、十八日）
- 杉の写生、槻の写生をなす（四月十七、二十、二十一、二十二日）
- 江戸川の図をかく（四月十八、廿日）西山の図を写生す（四月二十、二十一、二十二日）
- 月の出写生をなす（四月二十二、二十三日）春子動気にて医師をよぶ（四月二十二日）
- 弁慶橋をかく（四月二十四、二十五日）春子全快（四月二十六日）
- 清水の桜をかく（四月二十八日）大久保の桜をかく○住吉の祭礼あり（四月二十九日）
- 不動石像の写生をなす（四月三十日）槻の写生をなす（四月二十八、三十日）
- 牡丹開き初む○山吹の写生をなす（五月一日）竹藪の写生をなす（五月三、五日）
- 家族と共に北斗山に花つゝ、じを見る（五月四日）原市場の図かく（五月七、八、九日）
- 風邪咽喉いたく頭痛を催す（五月七、八、九、十日）
- 若王寺の景をかく（五月十二、十三日）淀橋の藤花をかく（五月十三、十四、十五日）
- 政子来泊す（五月十四日）榎間橋をかく（五月十四、十五、十六、十七、十八日）

- 宗建寺弁天の庭を写生す（五月十九、二十日）
 春子洋傘を盗まる○眼病の様子にて石にかゝる（五月二十日）
 円窓の写生をなす（五月二十五、二十六、二十八日）■の竹を写生す（五月二十七日）
 躑躅の写生をなす（五月二十九、三十一日）
 青梅を引払い東京宅へ帰る事となす○当分稲吉に同居す（六月二日）
 余は歯痛を覚へ医師大津に治療を受く○春子眼病よからず眼科医河本博士の診察を受く（六月二日）
 絵の補修をなす（六月六日）水彩画を学ぶ書生を集めて語る（六月八日）
 蓬莱亭に家族及秋山と会食す（六月十日）
 駒井町住宅に移る○竹下氏猶不去同居にて極めて蠅し（六月十一日）
 東屋の写生、庭の写生をなす○宮嶋家の事につき相談す好都合にゆかず大に迷惑を感じ○春子喜久井町へゆく（六月十三日）
 絵の補修をなす○小林文七氏に水彩二十枚売却す（六月十四日）
 竹下氏等出発す○書生及山本兄弟居残る（六月十七日）
 余も眼に充血す○春子猶可ならず諸角医院に通ふ○春子喜久井町へゆく（六月十八日）
 雨中の竹かき次ぐ（六月二十日二十一日）絵を直す（六月二十三日）
 麻布笑花園に写生す（六月二十三、四、五、七、八日）
 荷物取出しのため青梅へゆく（六月二十五日）鈴子来る事となる（同日）
 蓮池をかく（六月二十八日、二十九日）春子動気を起す（六月三十日）
- 松平東屋をかく（六月三十日、七月一日）春子のため医師来る（同日）
 美人図をかく（七月三、四、五、六日）入口に敷石を並べる（七月四日）
 宮嶋子供来泊○春子全快（七月六日）清水の図をかく（七月七日）
 欧米漫遊の旅券出願す鈴木氏を証人に依頼す（七月八日）
 東海道原へゆき次の列車にて鈴川にゆき鈴木屋に投宿す（七月九日）
 鈴川堤を写生す○御殿場富士をかく（七月十日）
 堤の写生成る○田子浦を写生す（七月十一日）
 鈴川橋を写生す○鈴川出発岩淵谷屋に投宿○愛鷹山を写生す宿屋よからず大に困しむ（七月十二日）
 岩淵富士を写生す○愛鷹山をつぐ○石川氏来会す○青梅より兼て頼まれし花子来る（七月十三日）
 帰京す（七月十四日）東京府より旅券下る（七月十五日）
 絵の補修をなす（七月十六、十七日）鈴子小杉へゆく○絵を直す（七月十八日）
 絵を直す（七月十八、十九、二十日）絵を直す（七月二十一日）
 大久保竹林を写生す（七月二十二日）石川氏吾家に滞在す（七月二十二日）
 絵を直す（七月二十三、四、廿五日）紫陽花写生す（七月二十五、六日）
 石川氏浅川へゆく○清子来泊（七月二十七日）八幡社を写生す（七月二十八、廿九日）
 文雄来る○勸業銀行株を売却す（七月二十九日）

絵を直す○清子来泊○春子喜久井町へゆく(七月三十日)
 植物園写生を始む○文雄帰る(七月三十一日)
 鈴木氏と共に早稲田農園に朝顔を見る○植物園の写生をつぐ○竹下氏出京投宿さる(八月一日)
 紫陽花の写生をなす(八月二日)紫陽花をかく(八月三、四日)
 春子病氣○清子、文雄等来泊(八月五日)
 植物園に第三の写生をなす(八月六日、八日)
 横地氏の家をとひ小嶋竹下豊田等と共に写真をとる(八月七日)
 鈴子小杉の家を去る○絵を直す(八月八日)文雄来泊(八月九日)
 菖蒲の写をなす○龍雄先頃より来泊病氣となる(八月十日)
 菖蒲の絵をかく(八月十一日、十二日)春子喜久井町へゆく(八月十三日)
 植物園庭第四成る(八月十四日)同蓮池及竹を写生す(八月十五、十六日)
 絵を直す(八月十七、十八、十九、二十、二十一日)蓮池及竹を写す(八月二十二、二十三、廿四、廿五日)
 竹下氏十津川中学校長として赴任に付新橋停車場上に於て山縣氏と共に三人会食して別る(八月二十日)
 長谷川千代子来る○半田まさ子来泊す(八月二十二日)
 絵を直す○夜浅井氏歓迎会のため上野梅川へゆく席上黒田氏と吉田氏との争あり(八月二十七日)宮嶋母及清子来泊(同日)
 絵を直す○鈴子帰り来る(八月二十九日)
 信州丸山氏の家へゆく○途中極めて暑し(八月三十日)
 丸山氏と共に■津蓮池の写生をなす(九月一日)

黒姫山にて秋草の写生をなす(九月二日)
 丸山氏を辞し小諸に藤村氏に会し夫より藤岡なる豊田氏を訪ひ愛に一泊す○同氏の家庭極めて賑やかなり(九月三日)
 藤岡中学校を参観し夕景帰京す(九月四日)
 絵を直す(九月八日九日)絵を直す(九月十二、十三日)
 宮嶋子供来泊す(九月十三日)絵を直す(九月十七、十八、十九、二十日)
 石川氏と共に本郷石黒に於て写真をとる(九月十八日)
 石川氏と共に日光へゆき南谷照等院に投宿す(九月二十一日)
 日光庭の写生をなす(九月二十二、二十三日)鳥居の写生をなす(九月二十四日)
 日光出発湯本吉見屋に投宿す(九月二十五日)
 雨中湯本出発馬返しつたやに投宿す(九月二十七日)
 山ツナミに逢ひ九死に一生を得途中幾多の危難を侵して日光に帰り山内四本龍寺に宿泊す(九月二十八日)
 漸く大谷川の架橋成りしを以て即時帰京す(九月三十日)
 敬子来泊す(九月一日)
 余等の送別会に臨む会するもの満谷、長尾、奥山、渡部、真野、中川、有吉、木村、都鳥、大倉の二氏は差支の由なり(十月二日)
 絵を直す(十月九日)
 妻児と共に鎌倉へゆき材木座光明館に投宿す(十月十一日)
 鎌倉出発途中横浜によりて帰京す(十月十三日)
 春子喜久井町へゆく(十月十六日)
 宅出発横浜にゆき上州屋に投宿し欧米行乗船のため検疫所へゆく但

し検疫なし(十月十七日) 以下△印は自宅日記なり

コレヤ号に投し二等船客となりて米国桑港に向ふ△誠子龍雄来泊す
(十月十八日) △豊田氏来泊さる(十月二十一日)

△春子弥生町へゆく半田へもゆく(十月二十二日) △豊田氏帰郷
(十月二十四日)

△誠子来泊(十月二十五日) △春子喜久井町へゆく(十月二十六日)
コレヤ号桑港に着、コスモポリタンホテルに投ず(十月二十八日)

桑港美術館を見夜は音楽をきく(十月三十日)
春子歯の治療をなす(十一月一日)

金門公園を見る△春子動気を起す(十一月二日)
桑港を發し汽車にてポストンに向ふ(十一月五日)

△春子正男と共に喜久井町へゆく(十一月七日)
シカゴに着し汽車を代へてポストンに向ふ(十一月九日)

ポストンに着しホテルオンダイクに投ず(十一月一日) △春子琴の
ケイコに行く(同日)

ポストン図書館を見る(十一月十七日) ポストン美術展覧会に臨む
(十一月十八日) ポストン美術博物館を見る(十一月二十二日) キ

ツソン氏等と会食す(十一月二十三日)
ポストンブランジールホテルに水彩展覧会を開く(十一月二十五、二

十六日)
セーラムなる松木氏の家にゆき終日遊ひくらす(十一月三十日)

夕汽車にてポストンを發しフヒラデルフヒヤに向ふ(十二月三日)
朝フヒラデルフヒヤに着し第七街の下宿屋に投ず○比日直ちにヘン

シルベニヤ美術館を見る(十二月四日)

フヒラデルフヒヤ美術工藝学校を見る(十二月八日)

△煤取をなす(十二月七日) 春子喜久井町へゆく(十二月十四日)
ボルドウイン機関車工場を見る○フレモントパークに遊ぶ○公園内

の美術博物館を見る(十二月十日)
フヒラデルフヒヤを出發ニューヨークに往き二十五丁目に投宿す
(十二月十一日)

安達氏に招かれ■に会食す(十二月十一日)

ニューヨーク、セントラル博物館及動物園を見る(十二月十二日)
アメリカンアートギャラリーに水彩展覧会を見る(十二月十三日)

ニューヨーク出發ポストンへゆきアプレトンの下宿に投ず(十二月
十八日)

クリスマスの宴に招かれ松木氏へゆく(十二月二十五日)
△宮嶋父上来泊さる(十二月二十九、三十日)

○経過

新年は家族と共に箱根宮の下に迎え十一日帰京十五日青梅に帰る爾
来米国行のため水彩画の写生及複写に忙しく暮し六月二日青梅を去
て東京四谷稻吉方に同居し同月十一日駒井町旧宅に帰り七月より九
月迄に東海道、信州、日光等に旅行をなせり日光に於ては大風雨の
為め殆ど懸命の難に逢ひたり十月渡米の為め暫時の別告をなさんと
て妻子と共に鎌倉に三四日を遊べり同月十七日家を出て十八日横浜
出帆のコレヤ号に投し同二十八日桑港着十一月五日ポストンに向ひ
同十日着爾来フヒラデルフヒヤ、ニューヨーク等を経廻り再びポス
トンに帰りて年を送れり

○ 健康

屢々風邪に罹り又時に頭痛を覚へし事多かりしも一度も医師を煩はさず六月奥歯に痛みを覚へ治療を受け十月外遊のため歯の掃除をなしセメントの填充を行へり

春子時々動気を起し三四日間床に就くことありて医療を受く五月以來網膜炎にて左眼を患ひ年を越ゆるも治せず

正男又極めて不健康其経過は正男日記に明なり

○ 読もの

主として読みたる新聞紙は国民新聞なり其主義には反対なれども主筆の青年教訓と蘆花氏の小説とを愛してなり雑誌は美術新報をとり他は時々購読するのみ書物としては即興詩人を始めとして多くの雑著小説を見たり

○ 学事

水彩風景画の写生四十三枚複写三十枚想像画二十七枚なり年初より描写せしもの、多くは東京小林に売却し猶アメリカカボストーンにて数枚を売れり○明治美術会はこの年より太平洋画会と改称し第一回の展覧会を開きたりその際数点出品し三枚を売却せり○画架に向ひし日は二百二日にして内写生に出し事七十三日なり

○ 経済

比欄は明治三十六年と関連するを以て爰に明記する能はず但収入支出大なる狂ひなく外遊につき竹下浩氏に金貳百金を借用せり

○ 正男日記

箱根に在て朝から夜へかけ三度位入浴父上母上に伴はれ宮の下にていろいろおもちゃを求む○おもちゃやおかみさんより美はしき小

さき籠を貰ふ(一月一日)

箱根より帰途小田原にて原田先生の御宅へより床の間にそ、うをなす○父上に負はれて小峰の梅園へゆく(一月十一日)

近頃昼間一時間程眠り夜九時頃就寝す朝は六時頃起きる○食事も沢山とる○ひとりにてよく遊ぶ(一月二十二日)

アマリタベルトドク、ワカッタなどよくいふ(一月三十日)

少しく鼻カタルを起す(二月十四日)

就寝の際の乳を止む(三月一日)

父上不在風吹きしをもて父上寒からんといふ(三月五日)

寺の高き椽より墮ち頭少しく腫る痛むとて夜大いに泣く(三月九日)

吐瀉し且下痢す原因不明(三月十三日)

先日撲ちし頭腫れ出す医師小林にかゝる(三月十五日)

頭部の腫れ膿をもちしを以て切開す跡は繃布を用ふ(三月十七日)

大いに心地よき様子父上につきまとひ父上大開口(三月十八日)

頭の腫れ一切全治す(三月十五日)

毒虫に刺れて額大いに腫れる医師に見せしも格別の事なしと(四月九日)

(九日)

三宅氏方にてとりし写真来る(四月十日)

毎夜父と共に眠らんといふて父上困る(四月十六日)

夜分大いに吐く北斗山にて花屋の人にするめを貰ひ食せし為とか

(四月十八日)

病氣全快す(四月二十日)

毎日郵便物受取のため父に負はれ母に抱かれてゆく(四月二十八日)

オートチャント、カーチャント、ボツチャントと三人でごはんタバコ

ネ(五月十一日)

大いに発熱風邪となる(五月十四日)

東京の旧宅へ戻りて二階へ上下して大いに喜ぶ(六月十一日)

鈴子等に対し意地悪をなす(七月十五日)

少しくそ、うをなし父上に大いに叱らる○文雄などを馬鹿にして気

俣をなす○言葉はよく分明す(七月三十日)

鈴さんと共に時々喜久井町の祖父母の家へゆくよく歩む(八月中)

発熱腸の工合わるし○キーキー声を出す(八月二十六日)

発熱医師長塚氏にかゝる(九月十日)

毎日熱高く元気あれ共や、やかまし今日より胸に湿布をなす(九月

十三日)

吸入をなす不相変湿布も用ふ(九月十五日)

漸く全快す(九月二十二日)

父上日光旅行中毎日母に問ふて曰くオトーサンハガイコクヘイラッ

シタノデスカ(九月二十七日)

ランプにて少しく指を火傷す(十月八日)

父上母上に伴はれ鎌倉へゆく○毎日浪うち際にて遊び跣足となりて

海水の来る処に入りて喜ぶ○沢山貝を拾ふ(十月十一日)

父上外国へ往かる雨ふり出しをもて父上カサヲオモチナスツカと氣

遣ふ(十月十七日)

母上、よし町おばさまと共に浅草へゆき弥生町へもゆく(十月二十

二日)

風邪、永塚氏にかゝる(十月二十三日)

全快(十月二十五日) 鈴さんと共に喜久井町へゆく(十月三十一日)

茶の間の椽より落ちて少しく頭を傷き諸角氏にかゝる(十一月二日)
是迄父上の手にて理髪されしが今日理髪店にて一分刈となる(十一
月六日)

母上と共に喜久井町へゆく(十一月七日)

父上の御噂のみなしてくらす(十一月二十二日)

祖父に伴はれ大隈邸の菊を見る(十一月二十七日)

独乙協会学校の開校式にゆき面白きもの沢山見る(十二月一日)

豊田さんにいるいろいろおもちゃ及帽子まり等を頂く(十二月(ママ)
日)

○親戚及交遊

弥生町及神田不相変なり鈴子は夏より吾家の人となれり宮嶋にては
久しく紛紜に日を送りしが五月頃喜久井町に下宿業を営むこととな
る

半田は大失敗にて閉店の不幸ありし為め円滑を欠けり

前年よりは交友相も不変なり新に交を結びし人にて尤も親しくせる
はボストンの松木喜八郎氏にして他に山縣五十雄氏あり鈴木氏とは
益々親し真野氏は七月頃結婚されたり竹下氏は六月京を去て大和十
津川なる中学文武館に校長として赴任されたり

○雑事

訪問来訪発信来信前年と大差なし被服は洋服セビロ一着ボストンに
て外套一着靴新調一足等重なるものなり

※判読できなかった文字は■で表した

〔論考〕

本稿では前回に引き続き、大下藤次郎の日記のうち明治三十四年から三十五年分に記された内容を紹介した。

明治三十四年は、大下の初めての著書『水彩画の栞』が出版された年である。前年より準備を始めており、一月に執筆開始、三月に脱稿、挿図などを作成し、六月二十四日に発売となった。この年のうちに「六版を重ね二万部」を売り上げたところから、いかに反響が大きかったかが分かる。一月、二月には水彩画制作の記録が少ないため、著書の執筆に集中していたと思われる。

『水彩画の栞』の題言（序文）は森鷗外に依頼をした。本稿で扱う日記には記載がないが、平行してつけられていた日記「吾家の消息」の三月二十七日の項には、「水彩画栞の出版に付森鷗外氏に序文を托しの処快く執筆致され候 短文なれどさすがに大家の筆なり 吾著書に光を添ふる事成る許ぞや」とある。森鷗外の日記には、「大下藤次郎著す所の水彩画の栞を寄せて序を求む」（三月九日）、「大下藤次郎の為に水彩画の栞に叙す」（三月二十一日）、「朝大下来り謝す」（三月二十二日）との記述がある。当時鷗外は小倉に勤務していたため執筆依頼は手紙でなされたようだが、三月中旬から鷗外は用務のため東京に一時戻っていたので、大下は直接礼を述べることができたようだ。

この本の出版により「質問或は絵画の批評を求むるもの」が増えたとのことで、前年に比べて受け取った手紙、出した手紙の数ともに二百通以上増えている。また水彩画を学ぶために訪ねて来た人物の記録も日記にしばしば登場するようになった。

五月には念願の青梅移住を果たし、戸外写生に明け暮れた。この年の「学事」欄には、風景写生二十四枚、描き直し二十七枚、記憶によって描いたもの四十四枚という記録があるが、明治三十四年（一九〇一）および翌三十五年（一九〇二）の年記を持つ作品は、現在国内では確認されていない。三十四年の日記に「比年七八月の候米国ポストンより松木氏来り兼て貯へありし水彩画の大部分を望まれ売て数百金を得し」、三十五年には「年初より描写せしもの、多くは東京小林に売却し猶アメリカポストンにて数枚を売れり」とあることから、描いたものはほとんど売却し、その大半がアメリカに渡ってしまったと考えられる。当館所蔵の大下藤次郎作品はほぼ大下家に遺されていたものであるため、この二年間に描かれた作品は全くない。最近、アメリカの個人が一九〇二年の年記のある大下の作品を持っているとの情報を得た。アメリカで調査を行えば今後もこの時期の作品が発見される可能性は高いと考えられる。

さて明治三十四年の夏に水彩画を大量に売ってまとまった資金を得た大下は、翌三十五年、アメリカ、ヨーロッパを漫遊する旅に出かけた。三十五年は渡米の準備をしつつ、出発する十月までの間も精力的に制作を行った。ちなみに本稿で紹介している大下の日記は、毎年正月に前年の出来事を整理して清書するのを慣例としていたが、明治三十五年はアメリカで年越しをしたため、この年の日記は帰国後の翌年七月に清書している。

さて渡米前の大下は、米国に持参する、あるいは旅行資金を稼ぐための絵を描きためるためもあって精力的に写生を行った。信州に丸山晩霞を訪ねたり、石川寅治と共に日光旅行をしたりと、遠出も

している。しかしアメリカ出発前には家族水入らずで鎌倉に旅行しており、家庭を大切にする大下の心遣いが感じられる。子煩悩ぶりは長男、正男の日々の行動を記した「正男日記」に如実に表れており、自身が留守の間の出来事も、おそらく後日妻にきいたのであらう、こと細かに記されている。

この年は明治美術会が太平洋画会と改称した年で、第一回展覧会が三月に開かれ、大下も「数点出品し三枚を売却」したとある。

八月二十七日に「夜浅井氏歓迎会のため上野梅川へゆく席上黒田氏と吉田氏との争あり」とあるのは、八月十九日にヨーロッパより帰国した浅井忠の歓迎会と思われる。黒田清輝と吉田博とが何を争ったのか興味が持たれる。

さて大下は石川寅治と共に、十月十八日に横浜を出発し、アメリカに向かった。サンフランシスコに到着したのが十月二十八日。美術館などを見学した後、十一月五日にポストンに向かった。ポストンには大下の絵を大量に買い取った松木喜八郎がおり、同月二十五、二十六日に水彩画展覧会を開くことができた。ポストンを拠点にフィラデルフィアやニューヨークも訪れ、この年の瀬はポストンで迎えることとなった。

欧米旅行の成果については、明治三十六年以降の日記の紹介と共に、次回の考察としたい。

〈資料紹介〉

河邊榮養 石橋和訓画伯小伝について

眞住 貴子

石橋和訓画伯小伝（以下小伝）は、洋画家石橋和訓（一八七六—一九二八）の没後、友人の河邊榮養によって記されたものであり、石橋和訓の実弟の家に残されていたものである。毛筆・楷書で記され、大きさは葉書程度の手作りの和綴じ本である。何冊作られたかは不明だが、石橋家所蔵本以外には今のところ発見されてなく、この一冊だけ河邊から石橋家へ贈呈されたものではないかと思われる。石橋和訓は、島根県の現出雲市佐田町に生まれ、幼少より画才にめぐまれていたため、周囲の助力で松江や東京で絵を学び、明治末期にイギリスへ留学する。通算十九年のイギリス生活から帰国し、東京で活躍しはじめた矢先に、突然の病で没した。画家としての活躍はイギリス留学期から本格的にはじまるが、長いイギリス暮らしのため、その資料は少なく、その生涯の全貌は、この小伝に寄るところが大きい。

作者の河邊について詳しいことは不明だが、小伝の中で島根県出身であること、石橋和訓より先に上京し、出雲大社の宮司の家系である千家男爵邸に寄寓しながら、慶応義塾大学に通う学生であったことがわかる。河邊より後から千家家にやってきた石橋の東京での生活を、起居を共にしながら弟のように何かと面倒をみた先輩であり、友人であり、同じ立身出世を願う同志のような間柄だったと推

測される。その交友は石橋が国内にいる間ずっと続き、イギリスからの帰国後も続いた。そんな河邊にとつて、帰国後これからという時の石橋の突然の死は痛恨の出来事であり、せめてその生涯を何かの形で残そうとこの稿を執筆したが、小伝の末尾に語られている。この小伝が記された時期については定かでないが、このような背景から石橋の死後間をおかず、数年の内にまとめられていると考えるのが妥当であろう。

小伝の内容については、起居を共にした東京での時代が最も詳細に記され、その前後の時代は、石橋との交友の中で聞き知り得たことを記したと考えられ、中には事実と異なる事柄もある。それはこの小伝の成り立ちが、元々書き残すために聞き書きされたものではなく、石橋の死によってその生涯を追想しながら時系列に編集されたものであり、思い違い等も見られる。時には石橋自身が河邊に真実を語っていなかったこともあっただろう。しかしながら、小伝の最後には年譜が付され、できる限り客観的に石橋の生涯を残そうとした姿勢を見せ、長く石橋和訓の研究には欠かせない基礎資料であったことはまちがいない。

一九九一年に林みちこ氏による論文「石橋和訓研究 明治洋画における肖像画の諸問題を中心に」で、この小伝が詳しく論述されて

いる。しかし全文については私家版であるため、これまで近親者や一部の研究者をのぞいて、人の目に触れることはなかった。

近年、様々な研究者から小伝の復刻を望まれ、今回全文を数回にわけて本紀要に掲載することとした。一部の旧字を除いて、できる限り原文のまま載せ、登場人物等については必要に応じて末尾に註釈を加えた。註釈については先行研究者である林氏の論文を参考にさせていただいた。記して感謝申し上げたい。

石橋和訓畫伯小傳 一

東京尊知河邊榮養述

石橋和訓画伯は幼名を倉三郎と云ひ・明治九年六月六日に島根縣出雲國飯石郡西須佐村大字反邊の一貧農家に於て呱呱の聲を揚げたり

以来出雲は山紫水明・隨て偉人傑物を産すること多し・彼の神代開關當時に於ける・偉神須佐之男命を始とし・國土開拓の大功を奏し給ひし・大國主大神を産出し・降て中古に至り・野見宿禰・傑僧辨慶・武人塩谷高貞・怪傑尼子經久・文豪雨森精翁等を輩出したる・光輝ある歴史を有す・出雲に於ても杵築及び須佐は・神代に於ける著明なる靈蹟を以て鳴れり

須佐は彼の須佐之男命が・故ありて高天原を退り給ひ・出雲の此地に至りて・凶惡無比の八肢大蛇を勦滅して・難なく稲田姫命を救援

し・其戰捷の結果凶らずも・天の叢雲の寶劍を得て・之を天照大御神の御許に贈り給ひし顯著なる靈蹟にして・今尚其縁由を垂るべき・手那槌及び足那槌の後裔連綿たり

付近山川溪谷の風致・超俗絶美他の追隨を許さず・玄妙の氣天地に鍾まり・神代の幽秀其儘の趣態を存せり・此地よりして非凡の穎才を産出するも・亦故ありといふべき歟・画伯生れて三四歳・尚未だ母の懷に抱かるる折より・不可思議にも・彼の昔より田家に醸造して貯へらるる濁酒の芳香を此上なく愛好し・何時も其枕頭に此濁酒を盛りたる・茶碗を備へ置かざれば・睡眠を執ること能わざる程の嗜好を訴へたり・近隣の人々は皆怪訝の眼を睜はりつつ・之を評判し合へりとぞ・後年に至り酒毒の為めか・画伯の鼻端赭熟色を呈し・容貌極めて奇異なりしかば・欧米到る所に於て・日本の枝豪天下の酒豪・赤鼻のミスター和訓といふ・雷名を全歐洲に裏かしたるも亦・奇といふべし

小学校に通学するに及び・学科の餘暇を窃みつつ・専ら武者繪又は漫画を得意に描出し・之を他生徒に誇示せしに・何時も他生徒の羨望且嫉視に逢ひては・之を教師に密告せられ・其結果時々教員より注告を受くることさへありき・然るに其手腕の脱俗超逸せること・小学校児童としては此類洵に稀なりとなし・時の受持教員吉川潔氏は・之を國弊小社須佐神社宮司須佐建真翁に推擧したり・翁は實に神代に於ける稲田姫命の祖神・手那槌命及び足那槌命の後裔として・翁に到るまで七十四代連綿・此須佐神社に奉仕の縁由ある舊家なり・

建真翁は付近に徳望あり・一意専念神事に奉仕の傍・南画を嗜好し且揮毫せらるるを以て・此神童を歓迎し且愛撫せられ・何時も社務所に呼寄せては・南画の手解きをなし・指導誘掖せらるること甚切なりき

當時画伯が通学し居たる・須佐小学校は・同村の一寺院久光寺といへるを・僻校舎に充てたりしが・日々通学する中に・其寺の住持某が・隣家一農家の未亡人と懇に親しみ交し居ることを発見し・小児心に之を中傷織悔せしめむものと・種々画策しつつ・或日僧と未亡人とが・互に手を握り合ひたる漫画を認め・之を諛寺院の門牆に貼附し置きたるに・数多通学の生徒等之を環視し・絶叫喧噪して止まらざるに依り・遂に其の住持の発見する所となり・画伯を悪むこと甚しく・村中を逐ひ廻はしつつ・竹箒を以て画伯を打擲したることあり・頑是もなき画伯は・住持の忿怒鎮静に至るまで・通学を敢てせざりしこともありき

斯くて数年の後・小学尋常科を了へて・高等科に進むべかりしが・郡内にては掛合村に・唯一の高等小学校あるのみにして・其高等小学校といへども・校舎狭隘なる為め・各村よりの入学志望者を・悉く収容教授すること能はざりしに依り・各村の戸長をして・優良児二三名づつを選抜せしめ・其数を査定して漸く入学を許したり・當時の戸長勝部勝四郎氏は・画伯の前途に頗る属望し・是非此高等校に入学せしめんものと・口を極めて勧告せしが・画伯の両親は・家庭貧苦の故を以て・之を固辞したり・然るに勝部戸長は・斯る神童

を土芥中に埋めしめむことを痛惜し・種々前途の比喩等を列ねて・両親を説得したる結果・両親も已むことを得ずして受諾し・断然掛合高等小学校の寄宿生として・画伯を入学せしむることに一決したり

即ち明治二十年春三月・画伯齡十二歳にして・懐かしき両親の膝下を辞し・四里餘を距てたる・掛合高等小学校に寄宿の為出發したり・見送として父親同道したり・見渡せば丘阜の梅花既に散り敷き・野塘の春草緑を急ぎつつも・櫻桃は未だ全く蒼を破らず・北山を廬す春寒は・動もすれば膚を刺さむとする・簾の川の隄塘に沿ひつつ・左に鳥屋丸山・右に琴引山の霊峰を仰ぎ・草鞋姿うひうひしく・父と共に歩を進めたり

道すがら身の将来に関する抱負等を・小さき頭脳に描き出しつつ・緘黙を守り行く中・父より将来如何なる方向に進まんとするやを問ひ掛けられ・画伯は稍躊躇したりしが・道は今將に溪流に沿ひ・折しも霖雨の後とて・右方春色濃き峰巒幾重にも折重なり・雨後の翠色滴らんとする・鳥屋丸山龍頭の瀑より・滔々として奔流する溪水・此深潭に落合ひ・一方郡の富豪田部長右衛門氏経営の・金山谷鉄坑より押下す・滓砂交りの濁流が・是亦滔々の水勢を漲らしつつ・茲に合流し・此轉合點より以下は・全河流混濁の色に変じ・岩壁に激し隄塘を嘯みつつ・ひた押しに押流るるを見たる画伯は・暫く之を憚りつつ・感に打たれたりしが・茲に人生觀を呼びしと覺しく・父に向て答へて日ふ様・人誰も其初は此龍頭の溪流の如く・極めて清

澄・純潔何所までも明朗にして・且愉快なる業績を積まんと欲するも・世間に出て滔々たる濁流に押揉まれるれば・遂には世間並みの濁流に包容せられ・不知不識の裡に・頓に自己の将来を誤る人多きは・極めて遺憾とす・自分は此溪流の有様を見て浸々と感に打たれたるを以て・向後斯かる濁流に包容せられざる様・心の駒に鞭打ちて進み度きものなりと・児童ども思へぬ程の卓見を滔々として河水の如く辯せしには・父も呆然暫し自失し・答ふる術を知らざりしといふ

掛合高等小学校寄宿中・家素より貧にして・学資等充分ならず・筆紙墨の如き必需品も・非常の節約を事とし・たまたま一帖の半紙を買ひ来らば・其の表裏共に真黒に染まり畫すまでも・習字或は習画を続け・春季に至れば自修の餘暇を利用し・村童等の翫ぶ紙鳶・即ち風の繪書きを励み・之を坊間に鬻ぎては・筆紙を購ふ資源となし・又は人の依頼に應じては・唐紙又は画箋紙類に・浮世繪或は漫画を揮毫し・其報酬を得ては授業料の補足に充つる等・刻苦辛酸偏へに家庭よりの・給資を軽減することに努力したり・時の郡長中村秀年氏は・画伯の斯の篤行を見聞し・時々賞賜して之を表彰したり

其後掛合高等小学校に於て畫画展覽會開催の折・画伯は臆せず高土觀瀑の圖を揮毫して・之を出陳したるに・飯石郡三刀屋町の雲南黄仲祥*1といへる南画家・此作品を見て大に驚嘆し・斯る児童の將來は實に測定すべからざる發達を為すものなりと・豫言せりと聞く・要するに画伯は貧家に生れ・学資乏しき窮境を見て・之に刺撃せられ・其資を得る為めの努力も手傳ひつつ・晝夜の別無く研鑽を積み・

只管精力を傾注したるに依り・何時しか児童に似合はぬ程の發達進歩を見たるなり

明治二十四年四月・掛合高等小学校を卒業したる画伯は・漸く須佐村の家庭に在りて・農事の手傳をなしつつも・尚斯道研究を怠らず・繪画に依りて身を起さむと欲するの念堅く・全年九月には南画家長瀬雲山*2の門に入りて・只管漢画修業の日を送りたり・然るに家庭に於ては・身体強健にして・然かも働き盛りの画伯を手離したることとて・農耕の繁劇時に在つては・之か為人を雇備し・労銀の多額を支出せざるべからざるを以て・到底水呑百姓の負擔に堪えずとありて画伯を雲山翁の塾より引戻し・農耕の手傳を為さしめんものとの・要求止まざりしを以て数ヶ月の後己むなく退塾して・家庭に帰りたり

然るに繪画修業の方針は・之が為めに挫折せず・夜間疲労の腕を叱咤しては・燈下に於いて専ら研修し・或時は一卷の画箋紙を肩にしては・付近村落を繪行脚し・袋戸棚又は掛額等揮毫の依頼に應じ・新築家屋を発見する毎に・屏風又は襖の揮毫を為さむと申込み・町村鎮守社の祭禮ある時は・掛行燈又は提灯に漫画を揮毫して・報酬を得・行き行きて郡境に至り・時としては遠く石見國にまで行脚を試みたることあり

石見國安濃郡川合村に在る・國幣社物部神社宮司金子男爵は・祭神宇摩志麻遲命の後裔にして・須佐の須佐建真家と同じく・由緒正し

き舊家なり・画伯は建真翁の紹介を得て・金子男爵家に至り・臆面もなく座敷の屏風に揮毫し・大に賞賛を得・若干の謝禮を與へられ・之を以て筆紙購入の資となし・益々其所志に向ひ・邁進努力し傍ら家事の手傳をも怠らざりき

今の大社宮島鉄道線の・須佐驛に近く・村の鎮守秋葉神社鎮座あり・其例祭に當る明治二十五年七月廿三日・画伯は付近の友達数名と共に之に参詣し・帰途に向ひし折り・一名の友人過ちて・淀川椽の崖上より・河中に墜落せしかば・同行の友達協議の結果・恰も猿猴が谷渡りの有様の如く・各自皆懸崖より・手を繋ぎ繋ぎて河底に吊し下り・漸くにして墜落者を救ひ上ぐるを得たり

画伯は数日の後・此状態を一幅の漫画に描出して・之を同行の人々に示したり・此漫画に登場の友人等は其風貌容姿の各皆真に迫りしに驚嘆せり・以て画伯が山水景致の揮毫よりも・人物肖像の方面に向つて・特技を發揮し行く素質あることを・斯る児童時代より・之を認識するを得たり・今に至るまで其節の生存者・打寄て此漫画を展覽しつつ・當時を偲び返し・彼の崖上に在るは熊吉氏・崖より稍吊し下りし第一人者は捨太郎氏・殆んど水面に近からんとするは龜助氏・墜落者に最も近く將に其手を握らむとすつあるは勇吉氏と・一々其容貌を酷似せしめて之を画き分けたるに・感じ合ひつつ・今尚一話柄となり居れり

其後画伯は松江師範学校画学部擔任教授後藤玉舟*³氏の門に入り

て・繪画の教授を受け・傍ら松江茶町の方圓舎にも通ひ・堀樫山*⁴氏に就きて・西洋画の研究をも始めたり・是れぞ画伯が洋画に入りたる初步にして・数年の後大志を齎らして欧米に押渡り・油画及水彩画上に・其手腕を大成したる第一階梯を為せしものといふべし・郡長中村秀年氏は・画伯に属望する所多大にして・斯る山陰の僻隅に朽ち果てしめんことを・深く遺憾とせられ・屢々画伯の両親に向て・注意を促したることあり・両親とても亦心窃に画伯の将来に期待せしと・如何にせむ家貧にして・画伯の爲めに上京の旅費を調達するの・資力なきを遺憾とし居たり

然るに画伯が立志上京の一念は・如何にしても押さへ難く・父母に懇請すること切なりしかば・己むを得ず家族中の暗着の衣類を鬻ぎ・又は母が嫁入當時持参せし・櫛笄の類をも賣り代なして・辛うじて僅少の旅費を調達したる時の・画伯の喜悅は筆紙に盡し難かりしといふ・此準備を了へたる画伯は須佐建真翁に乞ひ・在京の千家尊福男宛ての添書を貰ひ・亦一面にては中村郡長より・松平直亮伯に宛てたる依頼書をも受取り・勇躍して上京の途に就きたり・此時の画伯の旅装は垢浸みたる単衣に身を装ひ・草鞋を穿ちつつ・携帯品としては・隅磨り切れたる支那鞆一個のみ・實に見窄らしき形装をも苦とせず・勇ましく発程せり

時は恰も明治二十六年・画伯十八歳の夏にして・國境赤名峠の分水嶺までは・祖父の見送りを受け・茲にて袂を分ち・一路備後國尾道の乗船場を指して歩を進めたり・然るに画伯は元來虫類魚介を捕へ

て・之を寫生する事を好める性癖あり・折しも途中備後國河部村を行く時・河蟬の一群競ふて・路傍に飛翔するに逢ひ・性癖むらむらと起こりしかば・之を捕獲せんとしつつ・或いは小川を飛び躡え・或は野徑を經廻る内に・何時しか日没に達し・遂に尾道に到達するの時間を空費したり・依て其夜は村の木賃宿に一泊し・翌日漸く尾道の乗船地に着したるを以て・茲に安堵の思ひをなしつつ・大阪行の切符を買ひ・船中の人となりぬ

大阪に着船上陸し見れば・豪商巨館工場等相櫛比して・人馬昼夜を分かつたず街衢に絡繹し・紅塵揚がり・噴烟天を掩ひ・四邊濛濛たり・田舎出の画伯は・先つ此有様に一驚を喫し・一步一步足の地に着くを覚えず・目も眩し耳も聾せん許りの誘惑を感じしめられたり・斯る所に長居するは・又々失敗を招かんと・漸く数力所に於いて・道順を聞き合わせ・急ぎ梅田停車場に辿り着きて・東京新橋停車場（現今の汐留駅の在る所）への切符を買ひ乗車せしが・翌朝に至りて無事・新橋停車場に着し・茲に目的の伯爵及び男爵邸に近づくを得たり

画伯は先づ麻布區材木町の千家男爵邸に行李を解きしが・男爵は埼玉縣知事として・浦和町の官舎に起臥せられたりしも・暫くは麻布の邸に於て・庭掃書生として寄寓することとなりたり・其折同邸内には・今の出雲大社宮司千家尊統男・日御崎神社宮司小野尊正氏も寄寓せられて・夫々國學院大學等に通学・又執事としては西村清太郎氏あり・書生としては竹下春人・河邊榮養もあり・孰れも出雲出

身にして画伯の為に懇切指導せられ・居心地好く数日を経過したり其後半込區新小川町の・本田（マコ）錦吉郎*5氏に就き・一ヶ年餘洋画を研究し・大に啓発する所あり・又四谷區元町の松江藩公の邸にも寄寓し・専ら同郷人の同乗に縋りつつ・技藝の研鑽に是勉めたり・凭くて松平伯も千家男も・画伯が不拔の意志と・粉骨碎身の努力を奮まざるに・感激せられたるものか・時の帝室技藝員たりし・南画の大家瀧和亭*6先生の塾に・画伯を紹介して入塾せしむることとせられたり

画伯は松平・千家兩伯男の此好意に感激し・朝は未明に起出て・男爵家の兩伯庭掃除よりして・水汲み手傳をも済まし置きては・瀧先生の邸に通勤し・是亦熱心に庭掃除・水汲の手傳を励行し居たるに・未だ一回も瀧先生に直接するの機會を興へられず・稍落膽しつつありしが・夫れにも屈せず只管誠意を披瀝し・努力を奮まずして・日夜所信に向て邁進を続け・松平千家兩邸への報恩・瀧先生への通勤を一日も怠らざりき

凭くしつつある間に・郷里より携帯せし旅費の残りも・今は極めて僅少を剩すのみにて・日々の小使いにも窮迫を感じる様になりたれば・瀧邸への通勤の往復に穿用すべき履物もなく・不得已古下駄の鼻緒を・荒縄にて挿げ合せ・實に見窄らしき様子にて・怠らず通ひ居たり

和亭翁一日閑適の儘・庭前を見廻りつつありし際・この異様の画伯

の姿を見出し・之を内弟子の日高東岳氏に問ひ訊されたりければ・氏は画伯の生立に就き答ふる様・彼は出雲の片田舎に出生し・生來絵画を好み・若年ながら相當の手腕を磨き居れども・生家は極めて貧窮にして・彼に對し学資支給の餘力なく・斯くの如く見窄らしき風体にて立働らき居れりと・翁に向て愁訴哀願する所ありしかば・翁はその不拔の熱誠と堅忍の努力とに動かされ・東岳氏と共に画伯を居室に呼入れ・何にても欲する俵の一筆を揮ひ見よと命是られたるが・師翁に親灸せし其初めにして・画伯の心中喜悦に溢れ・感涙のせぜり来るを覚えざりしといふ

画伯は茲で自己將來の休戚の岐るる所と・渾身の筆力を傾注しつつ・一枚の即席画を認め師翁に示したり・翁は画伯の運筆の敏否に終始注意し・その臆面なき筆勢の雄健さに・舌を捲きて賞賛せられ・爾來内弟子の一員に差し加へられたり

故郷両親よりの送資も・時折杜絶勝ちなる画伯は・思う俟に稽古用紙も購ひ得ず・不得已他の門下生が截ち散らしたる唐紙・画箋紙の屑紙を広い來り・之を繋ぎ合せては・稽古用紙となしつつありし・其の辛酸の状態を・師翁何時しか見聞せられ・大に同情の涙を注がれ・其後は一層画伯を眷愛せらるるに至りしといふ

同門の寄宿生中には・画伯必死の勉強振りを羨やみ・且嫉む人々多くして・態と画伯の室に入り來たりて・喧噪妨害を試み・思う儘の勉強も敢てし難きを以て・一策を案出し・夜分自己の室を態と消燈

して・不在を装ひつつ・物音を立てず・窃に千家邸より貰ひ受け來たりし・古桶を横に倒し・其内部に豆ランプを入れて・かつがつに燈火し・尚其光線の外部に漏れむことを恐れ・蒲団にて之を被掩しつつ・自己も其の内部に平伏して・一心不乱に習修を続けしが・斯る苦心も遂には墮落門生達に依て・発見せられ・同塾中の物笑ひを招きしことありたり

其後も尚同門生の妨害・脅迫甚しきに堪え兼ね・詮方なく寄宿を一時断りて・松平伯邸内山口扶方の食客となり・四谷元町の同氏舎宅より・日々瀧先生の塾に通ひ・夜は山口方に歸りて・一意研鑽の勞を積みたりしかば・手腕も次第に上達し・屢々師翁より賞詞を漏らされたることありき

明治二十八年九月・画伯齡二十歳にして・東京美術協會主催の漢画展覽会に出品し・初めて公式の二等賞状を獲得・大に絵画鑑賞家より・嘖々の賞賛を博し・以て己れの自身をも深むるに至り・茲に断然絵画に依りて・身を起さむとの決心を固むるに至りたり

夫れまでの画伯は・世間青年時代の薄志弱行者流が・夢幻裡に描出して・無暗に世人の榮達を妄想するが如く・脳裡には種々の夢想も往來せし時代あり・時には師範又は中等教員の資格を羨みつつ・中等教員の検定試験に應じることもあり・或時は又意志一轉して・僅に中等教員位にて・一生を終らむも大人氣なし・宜しく郡長の位置を贏ち得べしと・望みしことあり

そは画伯の幼時・出身地の中村郡長が・各町村長の己が命令の儘に・一堂に招集して會議を開く場合・其席上の威風の如き・或は各町村小学校巡視の場合の如き・其四邊を睥睨威壓する有様の・如何にも尊大にして・且居丈高なりしを目撃して・深く画伯の脳底に印象せられ・夫れ以後は長く羨望の的となり居たりしを以てなり

然るに其羨望の的に・百尺竿頭一步を進め・府縣知事ともならば・又一段の光榮なるべしと・欲望も益々其歩を進むるに至りし動機あり・そは画伯が掛合高等小学校を卒業の際・諫校が創立後第一の卒業生を出せしこととて・島根縣知事態々臨場して・証書授興を行ひし時なり・是はまた郡長よりも一段の威風を靡かし・堂々として四隅皆其麾下に平伏する有様・實に是以上の榮位はまた有るまじと思はしめたり

乍併府縣知事の榮位は・今は官学萬能主義の弊風に脅かされ・無資格者の容易に望を繋げ難きことを・認識せし画伯は・茲に今まで描きし妄想を一擲して・繪画といへとも深く其の威を抜んで・枝名四境に透達せば・郡長又は知事の榮冠以上・世間より推奨せらるる価値を・發揮し得べしと深く感ぜしめられたる・一転機に遭遇したり其動機たるや・或一日芝公園東京府知事官舎千家男爵より召致せられ・何事ならんと推参せしに・男爵は近頃一幅の名画を入手したるに依り・之を鑑定・批評し呉れよとの事なりければ・画伯恭しく之

を床に吊し懸け・香を焼き置きて一禮なし・仔細に拝見し了り・之に對する愚見を開陳せり・然る所へ隣室に待ち居られたる・清浦奎吾伯・榎本武揚男・杉溪言長男・金子有卿男などの各紳士・徐ろに入り来りつつ・皆其画幅の前に額づきて・之を拝見せられたり・傍らに在りて此の有様を熟視したる画伯は感嘆之を久しくし・茲に當初雑多の希望を抱懐せしことを悔い・繪画の末枝と雖も・非凡の作と稱すべき・地位に置かるる以上は・斯の如き高位頭官の人々達も・皆頭を垂れ威儀を正して・之を拝見せらるるを見れば・彼の郡長又は知事の位置よりも・却て尊大なるを覚ゆ・宜しく曩の妄想を一擲して・本来の希望に立還り・猛然として研鑽の道に進まんものと覚悟したり

茲に迷夢を一掃したる画伯は・其翌日より再び瀧翁の塾に立戻りつつ・只管彩管を握りて勉強せり・然るに塾内には尚蔦の如く・門生中の腕白者・又は不良墮落の輩は・根絶に至らずして・妨害又は揄の弊風を残すを以て・思ふ儘に勉強もなし難く・頗る困難を嘆し居たり

或日和亭先生四方八方の談話中・自分は京都知恩院の實物中に・顏輝筆の蝦蟇仙人及び鉄捌仙人の画幅あり・尚同所二尊院所藏の張思恭揮毫・釈迦三尊の名幅ありと聞けど・之を一覽せしことなきが・終生の遺恨事なりと・如何にも口惜しげに・繰り返し給ふを聞きし画伯は・和亭翁の如き天下の名匠が・斯くの如く繰り返しつつ・遺憾とせらるる程の名画なれば・何とかして己も一度拝見して研究の

資の供し度・尚許さるるものならば・之を模寫して持ち帰り・恩師の渴望をも幾分和らげんものと・深く決意したり

一日此決意を打明けて・師翁の同意を得たれば・転じて其の方法に就き・松平伯爵と千家男爵とに協議したり・幸ひなる哉千家男爵は・先年まで島根縣簸川郡鱒淵寺に住職たりし・今の京都東山妙法院門跡大僧正村田寂頻師と昵近の間柄なるを以て・画伯を此人に紹介して・種々の便宜を與へしめんと・頗る懇切なる紹介状を付與せられたり

(以下次号)

【解説】

今回は、石橋和訓誕生からはじまり、やがて京都である松江、そして東京へと上京し、京都へ古画修業に行く直前までの明治九年から、明治二十九年の前半までを掲載した。

河邊自身も出雲の出身であり、石橋の生まれた奥出雲地方の歴史的・風土的背景の詳細から始まり、三、四歳から酒の香りを好むなど、後年の酒好きを裏付けるような、エピソードを交え、幼少の頃の石橋の様子がほほえましく語られる。全体を通して実家が貧しく、才能はあっても思う様に勉強することのできない少年が、本人の努力と周囲の助力によって出世していく様子が語られ、その刻苦勉励ぶりを強調している。作者の河邊は、内容から察するに、石橋と幼

少時を共に過ごしていたわけではなく、記された内容は石橋本人が語ったことや、石橋を知る人々から聞き知った事を中心に書き残したと判断されよう。明治の時代、石橋のように実家が裕福でなく、才能ある者が出世していくためには、その地方の有力者の手を借りながら努力し歩んでいくということが、よくわかる内容となっている。また、この時代の人脈は、その後の石橋の人生を通じてずっと関わりを持ち続ける事になる重要な人物の名がみられる。この時石橋がその後の人生の基礎を築いたことがよくうかがえる。文中、石橋が始め、南画修業から出発していることが語られるが、それを裏付けるように、地元には石橋の書画類が多く伝えられている。その殆どはイギリスから帰国した後に描かれたもので、十代の上京前の作品はわずかしかないが、それらは小伝に出てくる須佐建真の影響が強く見受けられる。上京後の作品については、はっきりと制作年のわかるものが乏しいが、明らかに瀧和亭の影響が見られる作品が、留学前後にいくつか散見され、若い石橋が常に師示した師のスタイルを踏襲する修業を行ったことが裏付けられる。本多錦吉に習ったとされる洋画については、現在のところ見つかっていない。上京初期の石橋についての情報は、この小伝の記述が最も詳しいが、若干河邊の文学的な解釈や、英雄の没後によく語られる大げさな描写は否めない。しかし何とか自分の身を立てようと努力した様子は、近くで見えていた河邊自身も同じ立場であったのであろう熱のこもった筆致で語られている。次号では、京都への修業から留学直前までを記載する。

〈人物注記〉

- 1 黄仲祥 文化一八(一八一四)年～明治一三(一八八〇)年
島根県飯石郡三刀屋町に石横山宗甫の次男として生まれる。初め堀江友声に師事。後に出雲に来訪した風外に師事。また上洛して貫名海屋の門で二年間学ぶ。その後江戸へ出て画名を高めた。一時出雲にも戻るが明治三年より再び東京へ出てそこで亡くなっている。黄仲祥が没した際、石橋はわずか四歳のため、小伝中の小学校時代の石橋の才能をほめた南画家は黄仲祥ではないだろう。
- 2 長瀬雲山 生没年不詳
地方絵師であったと思われるが、画歴は不詳。むしろ石橋和訓の師として伝わっている。島根県雲南市のゆかりの寺に作品が伝わっている。
- 3 後藤魚洲(文中玉舟) 生没年不詳
後藤魚洲のまちがいであることが、林みちこ氏の論文で指摘されている。また後藤が、一八八〇(明治一三)年、本多錦吉郎の彰技堂に入門、その後図画教員となり島根県師範学校に赴任していることから、石橋が後藤から学んだのは南画ではなく洋画である可能性も指摘されている。
- 4 堀櫟山 安政三(一八五六)年～明治四二(一九〇九)年
松江市に生まれる。本名宗太郎。狩野派の絵を祖父に習う。明治一六(一八八三)年、小豆沢碧湖に洋画を学び、翌年方圓学舎という画塾を開くが五年ほどで閉鎖。並行して島根県師範学校兼島根県第一中学校の教員を勤めた。
- 5 本多錦吉郎 嘉永三(一八五〇)年～大正一〇(一九二一)年
江戸に生まれる。幕末より英学をおさめ、明治に入り、西洋画報の研究を志し、国沢新九郎の彰技堂に入門しその継承者となる。明治中期の洋画界を牽引した。
- 6 瀧和亭 文政一三(一八二〇)年～明治三四(一九〇一)年
江戸に生まれる。一六歳の時大岡雲峰に明清画を学び、その後長崎で僧鉄翁に六法を学んだ。古画の模写をよくし、南画の画技を磨いた。維新後、万博や内国勸業博に出品し活躍。明治二六年のシカゴ万博では、「孔雀図」で銅賞を受賞。また帝室技芸員となる。美術史家、瀧精一は長男。

島根県立石見美術館

研究紀要 第4号

発行日－平成22年3月31日

編集発行－島根県立石見美術館

〒698-0022 益田市有明町5-15

TEL 0856-23-2050 FAX 0856-31-1878

印刷－株式会社タイピック